The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Interface humanities 05
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13019
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Interface Humanities

05

不安をかたどる

Contents

特集　不安をかたどる

3　対談・不安をかたどる　春日 匠×中岡成文
6　不安と非知　家高 洋
12　不安のミニマリズム―現代アメリカ小説の行方―　片渕悦久
16　「失う」不安　前田達朗

Interface 人とネットワーク
18　モダニズムと中東欧の芸術・文化
20　ジェンダーの視点から問題知を共有する　ジェシカ・バウエンス
21　他者理解へ繋がることば　松本敬子

ih.Topics
22　阪大フォーラム「日本、もうひとつの顔」
2004年度「インターフェイスの人文学」ワークショップ
コミュニケーションデザイン・センター発足
イベント情報

現代(いま)を測る
26　マンガと差別の悩ましい関係
表 智之

フィールドのざわめき
28　フィールドからの「声」
―高齢者施設での動物・ロボットを介したケアの事例より―
加藤謙介

人文学のフロンティア
30　テキストから肉声へ―フランス古典主義演劇の校訂テキストをめぐって―
藤本武司

32　編集後記

Feature: Figuring Anxiety

3　Figuring Anxiety
Sho KASUGA / Narifumi NAKAOKA
6　Anxiety and *Nichtwissen*
Hiroshi IETAKA
12　Literary Minimalism of Anxiety in Contemporary America
Nobuhisa KATAFUCHI
16　Uneasiness of the Ethnic Minorities at the Language Shift
Tatsuro MAEDA
18　Modernist Art and Culture in Central -Eastern Europe
20　Discussing Problematic Knowledge from a Gender Studies Perspective : Jessica BAUWENS
21　Language for Understanding Others : Keiko MATSUMOTO
22　Interface Humanities Topics
26　A Subtle Relation between Manga and Discrimination
Tomoyuki OMOTE
28　"Voices" from Fields : Cases of Care with Animals / Robots at Elderly Institutes
Kensuke KATO
30　From Text to Voice. A Critical Version of the French Classic Theater
Takeshi FUJIMOTO
32　Editorial Note

Interface Humanities

特集

不安をかたどる

現代は不安に満ちた時代だといわれます。本来あいまいで、つかみどころのない不安が、なぜ、どこから来るのかを説明することは簡単ではありません。そもそも何が不安なのでしょうか、それはどのように語ることができるのでしょうか。こうしたもっともナイーブな問いかけのうちに、複雑な問題に近づく道筋がひそんでいると人文学は考えます。不安を言葉にあらわして、ひとと共有することは、不安という漠然としたものの正体を突きつめていくうえでは、遠回りに見えるかもしれません。しかし不安は、まず言葉でかたどられないかぎり、けっして立ち去りはしないでしょう。では、人文学は不安をいかにしてかたどるのか。これが、今回の特集のテーマです。

対談・不安をかたどる 1

ゲスト　春日匠（NPO法人サイエンス・コミュニケーション事務局）
ホスト　中岡成文（大阪大学大学院文学研究科教授・臨床哲学）
司会　三谷研爾（大阪大学大学院文学研究科助教授・本誌編集長）

人文学がとらえる不安

――先日の新潟中越地震や台風による災害をはじめ、犯罪、テロ、食品衛生問題、医療問題など、いまや不安をもたらすファクターは、身近なところにあふれています。いったい人文学は、こうした不安にたいしどのようなスタンスで臨むのか、また臨むことができるのか。そんな問題意識から、今回の対談をセットさせていただきました。

まず最初に、これまで不安は人文学のなかでどのようにとらえられてきたのか、簡単に振り返っておきたいと思います。私の場合はドイツ文学が専門で、特にカフカを中心に研究してきました。カフカというと、「不安の文学」とか「絶望の文学」と呼ばれることがたいへん多い。つまり、彼が生きていた一九世紀末から二〇世紀の初めにかけてヨーロッパでは、ものすごく大きな文化の地殻変動がおこり、そのなかで不安は人間の存在には欠かせないもの、不安という契機があってこそ人間は人間たりうるのだ、という考え方がでてきたと思うのです。カミュやサルトルといった、第二次世界大戦後のいわゆる実存主義の文学は、こうした思想の流れを汲んでいる。そこでの不安というものは、乱暴な言い方をすれば、ある種望ましいもの、なくてはならないもの、そのかぎりでポジティブなものとすら受け止められてきたのではないでしょうか。

中岡　つまり、不安というものと人間存在というものが表裏一体の関係になっていて、不安を除去するという話にはなかなかなりにくいわけですね。

もともとドイツ哲学をやっている人間からしますと、不安と言ってすぐ思い出すのは、

やっぱりハイデガーの『存在と時間』で展開された考え方です。彼が考えている不安というのは、三谷さんがおっしゃられたように、まさに人間が自己の底に横たわっている「無」というものに気づくきっかけになるものなんですね。

ハイデガーから学んだサルトルの場合、『嘔吐』という小説のなかでロカンタンという主人公が、ぶよぶよしていて、きちんとしたかたちのないマロニエの木の根っこを見て、文字通り嘔吐をもよおすという場面があります。誰しもそういう不定形なものに脅かされているように感じることがある。それは逆にいえば人間の実存、サルトルの言葉でいえば「対自」というものが持つ危うさとか脆さというものが、不確かなものから逆に照射されてきているのでしょう。

――文学にせよ、あるいは哲学にせよ、そこでの不安はたいへん形而上学的なもので、実際に現実世界で起こっている事象を直接的にとりあげるのではなく、抽象化して議論してきたわけですね。しかも、たとえば大衆社会の到来、ファシズム国家の成立、あるいは核戦争の危機といった人類の生存自体が危うくされる大状況との関わりから、形而上学的不安が滲みだしてくるおもむきでした。

ところがいま語られている不安を見ますと、冒頭であげたようにたいへん日常的です。形而上学的な議論など吹き飛んでしまい、ごく身近なところに不安、危うさ、安全を脅かすファクターがある。形而上学的な不安と、現在の日常的な不安との落差とでも言うのでしょうか。

春日　私の見るところでは、昔の不安も現代の不安も本質的な部分ではそんなに変わらないのではないかと思います。というのはおそらく、二〇世紀初頭くらいまでの不安やそれへの対処法は、ある程度高いレベルでリテラシーを持っていた人たちの課題だったからです。不確定性がやってくるような社会状況、外部に直接晒されるような社会状況が、そういう人たちに直面するようなかたちで入ってきたから。

たとえばドイツでファシズムが席巻してきているらしいとか、核兵器の問題はこんなに深刻だという情報はやはり、それなりに本を読むとか、あるいは国際的に他国の人とコミュニケーションできる人たちのものだったわけで、一般の人たちはそういった不安を感じられるほどの情報を持っていなかった。あるいは無視されていた可能性も調べなければいけないですが、少なくとも高いレベルでリテラシーを持っている人たちが直面する問題だったと思うんです。

ところが一九八〇年代くらいから情報化が進み、他国の情報が瞬時に入ってくる、あるいは貿易や観光化によって人間や文物が直に行き交う状況のなかで、普通の人も不安に直面せざるをえなくなった。さらに、民主主義の浸透やNPOの活発化によって普通の人も自分の不安を広く社会に訴えやすくなってきたために、不安がより共有されるようになって

きた。すると今までのように、それを哲学的あるいは文学的に純粋なかたちに高めて議論するという方法ではだめで、より生活に密着した形で語らないと普通の人が納得するようなものにならないわけです。

もちろん、科学の発達によって不安の根源になる問題そのものも非常に複雑化しているので、人文科学だけではなかなか処理できないような、複雑さと速度を持つようになってきたということもいえると思います。

――「不安の共有」というポイントは、とても重要ですね。抽象的・形而上学的な不安から、より一般性のある、流通性の高い不安へと局面が展開しているわけですね。

中岡　私も哲学的な不安の表現とか捉え方と、普通の人間の不安の捉え方は全然次元の異なったものではないと思います。たとえば先ほどハイデガーの話をしましたが、彼の場合は存在論的な不安の捉え方ですよね。

面白いことに、この「存在論的な不安」という言葉が、現代のある病理的な現象を捉える時にも使われているんです。それはアルコール依存症などにかかわる「共依存」という概念に出てきます。アルコール依存症の人は多くの場合男性ですから、妻が夫を一生懸命サポートするわけです。しかしそれが結果的にはアルコール依存状態を続けさせることになってしまう、と言われています。

なぜそうなるのかというと、妻のほうにこの人は自分を必要としているという意識が芽生えて、自分が誰かに必要とされている存在でありたい、そうでないと自分の存在価値がないというふうな方向に働いてしまうわけです。そこで存在論的な不安という言葉が使われます。これは具体的な不安ではなく、自分の足元に対する不安で、ある意味で存在論にもそのまま通じていくタイプの不安かなと思います。

←P8 へつづく

Case Study 01

不安の意味をかたどる

不安と非知

家高 洋

現代の「不安」にはしばしば、科学技術が関わっている。たとえば、有害化学物質の流出の原因は化学工業の生産技術にあるし、また、止まることを知らない遺伝工学が描く未来の社会像も「不安」を呼び覚ます。そして、科学技術が関わるこのような「不安」に対処するために、近年、リスク・コミュニケーションが急速に発達してきたことも周知の事実であろう。

ところで、「不安」に人間存在にとっての積極的な意義を見いだし、それを人間存在の「根本的な感情」と呼んだのは、『存在と時間』で知られるドイツの哲学者ハイデガーである。ハイデガーは、「不安」と「恐れ」を区別する。「恐れ」にはそれを引き起こす原因があるが、「不安」にはそのようなものが差し当たり見出されないとハイデガーは言う。「不安」は、「何となく不気味だ」と感じられ、目の前にある存在者がすべて「何ものでもない」と思われる体験の中で起こる。「不安」は人間存在を瞬間的に襲う。その体験の中で私たちは、目の前にある存在者から自ら自身の存在へと回帰し、みずからの「有限性」を自覚すると共に、その「本来的なあり方」へと目覚める契機が生じるのである…。

一九二〇年代ドイツの危機的な雰囲気を表現し、その危機の「超克」を呼びかけるハイデガーのテクストの異様な緊張感に今日の私たちが違和感を覚えることは、おそらく避けがたい。また、ハイデガーの「不安」と現在の科学技術についての「不安」とはまったく異なるように思われる。しかし何らかの接点もあるのではないだろうか。

現在ドイツの社会学者ルーマンは、現代の「不安」を「非知」という概念に結びつけて捉え直している。「非知」とは、「知らない」「わからない」ということであるが、ルーマンの議論の特徴は、この「非知」を「特定化される非知」と「特定化されない非知」とに区別することにある。

「特定化される非知」とは、「今はわからないが、いずれ分かるであろう」と考えられる知であり、予想可能な非知であるとも言えるだろう。科学技術のリスク・コミュニケーションは、このような「特定化される非知」に基づいているし、科学技術の活動も同様である。つまり、科学技術は、解明されるべき領域をみずからの枠組のなかで設定し取り組むのであり、「いまは解明されていない領域」を「征服しよう」とする。しかし、ルーマンによればこの「征服」は完了しない。というのは、ある領域が解明されたとしても、その時には、解明されるべき別の領域が見出されるからである。

他方、「特定化されない非知」は、事前には予想されえないような「非知」をいう。たとえば、オゾンホールが「発見」されたケースのように、以前にはまったく予想もされなかった出来事が挙げられる。また、リスク・マネージメントにおいて、あるリスクを制御するために採用された手立てが、それ自身予想外の別のリスクを生み出す、ということにも当てはまるであろう。つまり、「わかっていない」ということすらも「わからない（したがって制御できない）」ことが科学技術のなかには存在しているのであり、それが科学技術についての漠然とした「不安」を引き起こしているのである。

この「不安」のなかにこそ、科学技術の営みの根本的な「有限性」が現れている。そして、「不安」はこの「有限性」に対する態度の決定を私たちに呼びかけている。科学技術についての「不安」は、ハイデガーの場合と同様に、その事柄の本質的なあり方を示すという「機能」をはたすのだ。そのかぎりで、この「不安」の「機能」は、いわゆる「知」の次元では届かない、存在のより深い層に関わるといえる。

ルーマンとハイデガーとの接点は、しかし、ここまでである。「不安」を経たのち、ハイデガーは、人々に「先駆的覚悟性」を語りかける。他方、ルーマンは、「非知のマネージメント」を唱え、不確実性が支配する世界のなかで暫定的に結論を出しながら、他者と柔軟に関わるように勧めている。「不安」についての二人のちがいは、哲学者と社会学者とのちがいというよりもむしろ、時代と状況のちがいに関わっているであろう。

家高 洋（いえたか・ひろし）
一九六六年生まれ。COE特任研究員。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。専攻：哲学・哲学史、現象学、科学技術論。論文：「奥行きの経験」（『カルテシアーナ』第一二号）、「身体と空間」（『メタフュシカ』第三一号）他。翻訳：ブーヴレス『ウィトゲンシュタイン、近代性と近代主義』（『季刊 ichiko』第三六号）他。

対談・不安をかたどる 2

知の共有の可能性

——現在起こっているような非常に具体的な、日常的な不安の背景には、問題に向き合うときどのような対処すればいいのか、一般市民には見えていないという現状がありますね。つまり、不安だけが共有されてしまい、それに接する専門知はけっして共有されていない。それどころか、社会全体が細分化されてしまい、専門知によって分断されてしまっている。情報リテラシーの向上と裏腹に、いったい何がどこから起こっているのか、素人には皆目分からない、という状況にあるということでしょうか。

春日　大筋ではそうだと思いますが、ただ専門家と市民のあいだの知識水準の落差というところに議論を落としてしまうと、おそらくパズルは解けなくなってしまうのではないでしょうか。要するに科学とか専門性がコントロールできるような知識領域と、市民の知識領域が少しずれているというところを考えていかなければならないと思うんです。

そういう問題意識のもとでおこなっているのが、NPO法人サイエンス・コミュニケーションのやろうとしているサイエンスショップです。どういうものかといいますと、いろいろな問題意識を持った人、困ったことがある人が相談に来ると、それに対して研究や計画をたて、適切な科学者を動員して研究・開発する。要するに子ども相談室の発展版みたいなものです。

科学研究というと、古典的なかたちでは科学者自身が問題を見つけ、その研究方法とプランを練り、予算を確保して研究し、論文を書いていたわけですね。それが現代では、企業や政府などの大きな組織がお金と研究計画を出して、このプランで研究してほしいと専門家に委託する。それにたいしてサイエンスショップは、お金を持っていない組織や個人でも問題を持ちかけることができます。研究費や人件費などの費用は大学や政府あるいはNGOなどから予算をとって、相談を持ち込んだ市民には課しません。

——「ショップ」というと、まるでお店のようなイメージですね。

春日　サイエンスショップという言葉には、いくつもの意味合いがあるとは思いますが、もともとはオランダでの概念です。一九七〇年代から世界各地でポピュラーになった言葉で、背景にはおそらく当時公害問題

科学とか専門性がコントロールできるような知識領域と、市民の知識領域が少しずれているというところ

などがあったと思います。

このサイエンスショップに限らず、コンセンサス会議など科学技術の問題に対応するような仕組みは現在いろいろありますけれども、市民が科学者・専門家にお伺いを立てるのではなくて、むしろ専門家が自分の見えていない問題を探し出すという仕組みにならないとまずいなあと思っています。

というのは、人々の生活世界というのはなかなか言語化できないような領域を多く含んでいます。最近ではアフォーダンスといって、学問のなかでも言語化できないものを言語化する、定式化する試みが進んでいますけど、そういうところは今までなかなか議論にあがってこなかった。

八〇年代ぐらいまでの巨大インフラの場合、テレビ塔や高速道路の建設など現地の生活の実態などを見ることなく行政が大量の資本を投資していきなり生活の中にドーンと導入されていたわけですね。ところが現在はそうはいかない。たとえば遺伝子組み換え作物の問題でしたら、農民はその土の状況ですとか、その年の天候などに合わせて、少しずつ自分の振る舞いを自然に変えているわけです。そういうところを無視して、同じコンテキスト、同じコンディションのなかでグローバルに実験・開発された種子を蒔くというような状況を押し付けてしまうと、矛盾や軋轢が生まれてくる。現場の知識を無視して専門家の知識を押し付けているような状況はまずいなと思います。

ハーバーマスが唱えるような、公共的討議をとおして合意を形成し、問題解決を図るというモデルにたいして僕が不満なのは、人間はある程度均質で、同じ言語能力を持っているということが前提とされているところです。そうではなくてアントニオ・ネグリが言う「マルチチュード（雑多）な身体」のような、言語にならないような部分をうまく科学論争の中に取り入れていく仕組みを作らないと、なかなかうまくいかないのではないか。専門家の知識体系の中に、専門外の人の知識をいかに導入していくかが、おそらく今後の課題だろうと思います。

――ということになると、コミュニケーションというものじたいを、とらえ直さなければならないですね。つまり、知のありようや形態の違いがあることを前提にして、そのあいだを媒介しなければならない。ただ、伝統的な人文学は基本的に言葉の学問であり、言葉による思考能力は万人に等しく与えられている発想をとりがちです。言語化されない部分を組み込んで不安について考えることは、たいへんむずかしい。そのためには、やはりきわめて具体的な場面に立ち返ることが大切ですね。

仕掛けとしてのコミュニケーション

中岡　具体的な場面で考えるとき、最初に春日さんがいわれた不確定性というものをうまく減らしていくことが、不安を解消するための条件のひとつにありますね。たとえば目を閉じてしまって、周囲を全然知らなければそれなりに不確定性を減らして安心できるようになるわけですよ。そういう消極的なやり方をとることも現実にあると思うんです。

でもそれではまずい。たとえば今、裁判員制度が導入されようとしていますけれども、あれは強制なんです。しかるべき理由がないと、裁判所の呼び出しを断れない。それは普通の人にとってはかなり負担でしょう。それくらいはプロがやってくれよという人が正直なところかなりいると思うんですよね。

だけど、民主主義的な社会では、裁判という非常に重要な局面では全ての人が関わることを引き受けることも必要でしょうね。情報を適切に入れながら前向きに対処していくことが必要になってくるわけです。

——専門家がいるということじたい、社会的分業化の現れですよね。そうであればこそ、裁判は裁判の専門家に任せ、医療は医療の専門家に任せることができる。裏を返せば、ある分野の専門家も、自分たちの専門の領域を一歩出れば一市民、つまり非専門家に戻ってしまう。それが現状だと思うわけですが、今のお話ですと、分業は分業として認めながら、なおかつ別の専門をも引き受けていく。専門家に全面的に任せてしまうのではなくて、一定のコミットメントをすべきだということですね。

中岡　もちろんそのためには制度自体も変わっていく必要があって、市民に開かれる必要があるし、市民のほうも自ら開いていく必要がある。双方向の働きかけが必要だと思います。

春日　ときに問題が複雑すぎて専門家を決められない場合が非常に大きな問題かなという気がします。典型的な例が核兵器からバイオテロへと脅威が移り変わっているところです。核兵器の問題だったらなくすことが目標になるのは誰が考えても当たり前で、単純に政治の専門家の問題ですけれども、バイオテロになると、誰が行っているのかという行為主体もはっきりしないわけです。

今、重要な問題になっている例が天然痘の遺伝子研究を再開するか、それとも現在残っているサンプルを全て破棄するか、あるいはこのまま保存するかという議論です。研究することによって逆にバイオテロに利用される可能性もある。さりとて、研究しておかないと、万が一の場合に対処できない。こうした問題を決めるのは誰かというと、医療の専門家だけでは不可能で、いろんな専門家が関わってこなければできない。逆にいえば、そんな特殊な問題の専門家なんて誰もいないというような状況が生じてきてしまっている。それで否応なく市民を議論に巻き込む必要性が出てきています。

——その点、臨床哲学研究室では哲学カフェやソクラティク・ダイアローグなどの取り組みを通して市民的な対話を試みておられますね。

中岡　今年の四月、コミュニケーションデザイン・センターが大阪大学内にできますよね。そのなかには、科学技術コミュニケーションのセクションもできます。おそらくそのセクションがひとつの中心となり、たとえばNPOとタイアップしていろんな対話的活動をやっていくこと

になると予想します。そういう意味では大学も市民との接点をより多くし、多様化させるということになっていくんじゃないかと思います。

春日　いろいろ問題もあるんでしょうけど、そういう意味では大学の法人化もひとつの追い風にればいいですね。

中岡　学問の府である大学が、市民との接点を持とうとした時には、先程から話があった「知」というものの形態自体が変わっていく必要がありますよね。さらに知の流通を本格化させようと思ったら、学問自体が自己解体の危険に身を晒してまでも、何か具体的に市民のニードにこう答えていくんだっていうことを示さないといけないと思うんですよ。

私が以前春日さんからうかがったサイエンスショップのお話で、面白いと思った事例はオーストリアのグラーツ大学で、市民から持ち込まれたテーマを卒論の主題にするというものです。それをひとりひとりの学生が卒論で扱えるような形に変えて研究させる。学生の勉強にもなるし、市民にもその成果が還元されるというふうになっていました。

――学生は具体的にはどんなテーマに取り組むんですか。

春日　イギリスの事例だと、病院のボランティア、ケア係を担当する人の、評判がよくなかった部分をパートにわけて聞き取り調査して、システムを改善したという事例があります。医療とか疫学調査のようなものだと、ある程度人海戦術で調査ができるので、多いと聞いています。オランダのケースだと、新しくできる工場群の環境アセスメントと経済効果調査を学生がし直した。これらはオン・ザ・ジョブ・トレーニングの機会にもなります。

中岡　そういう意味でサイエンスショップというのは、教育としても重要な機能を果たしうるんですよね。

←P14へつづく

Case Study 02

文学は不安をかたどる

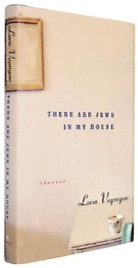
不安のミニマリズム——現代アメリカ小説の行方

片渕悦久

多民族国家アメリカは移民の国であり、移民体験はアメリカ人になるための避けがたいひとつの現実として、アメリカ文学の重要な素材ともなっている。実際、十七世紀の植民者の記録から二十世紀のユダヤ系自伝小説まで、さまざまな背景をもった移民体験が語り継がれてきた。

こうした動向をアメリカ文学の現在に絡めてみるとおもしろい。特筆すべきは、最近の移民系文学の中に、移民体験とはたいした関係もなく語られる物語が少なくないことである。それどころか、やや極端な表現をするなら、ただそこにアメリカがないのである。

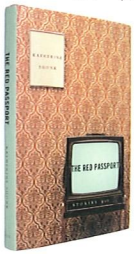
比較的最近に発表された作品をふたつ具体例としてあげてみよう。ラーラ・ヴァプニャールの『うちにユダヤ人がいます』と、キャサリン・ションクの『赤のパスポート』、どちらも二〇〇三年に出版された、本格的な単行本デビューとなる作品集である。ちなみに、前者は九〇年代にロシアから移住した作家、後者はアメリカ生まれだが、ロシア系の作家である。ヴァプニャールの短編には、ニューヨークのブルックリンを中心に現代の移民生活を描く物語もあるが、大半は現代ロシアを舞台に、とりわけ作者自身の移住前の分身とおぼしき人物を軸に、ミニマリズム風の味付けが施された物語である。ションクはさらに徹底しており、作品の舞台はほぼロシアに限定され、異国の物語空間の中でロシア人、あるいはロシア系アメリカ人の生活を淡々と綴る。



ところで、ミニマリズムとは一九八〇年代に際立ったアメリカ文学のトレンドだが、身近な出来事を簡潔に描き、ドライな感覚で現代アメリカ人の抱える心の不安を語る作風は、読みやすさもさることながら、冷戦期（あるいはヴェトナム戦争後）の精神的疲弊を浮き彫りにする物語的戦略でもあった。埋めることのできない自己の欠落感を表現するために、大きな物語ではなく、即物的でドライな文体による小さな物語を細かく突き詰める方法が採られたのも、アイデンティティのありようを大仰に語ることがもはや時代錯誤にほかならない現代では、ごく自然な流れであったのだろう。

長編よりも短編を好むアメリカ文学の現状（もちろんアメリカに限らないが）を考え合わせてみても、今も基本的にミニマリズムは生き延びていると言ってよいだろう。ただ注目すべきは、アメリカ生まれかどうかはさておき、ヴァプニャールやションクのようなロシア系作家が、ミニマリズムの作風を継承していること、その上でアメリカから距離を置いた物語を書いていることである。

これを冷戦後の宗教対立、地域紛争、そしてテロの脅威に混迷するネガティブな現代の時代精神を掘り下げることによる、旧来の移民体験物語の乗り越えと見ることも可能だろう。あるいは、移民体験記とミニマリズムをともに換骨奪胎し、祖国とも異国ともつかない風景を描く、脱アメリカ小説とも呼ぶべき新たな文学が生まれたとでも言うべきかもしれない。ションクの物語のひとつで、ロシア系アメリカ人のヒロインが、自分はロシア人以上にロシア的なのだと臆面もなく言い放つ場面は、きわめて象徴的である。



決して全般的な傾向ではないにせよ、現代アメリカ文学に台頭するこうした流れを、アメリカ離れの意識と結びつけて読むとどうだろう。それはグローバリズムという名のアメリカ至上主義が浸透したひとつの結果なのか。アメリカという求心力に抗うことから生まれた反動的な異国羨望であるのか。それとも暴走するアメリカに対する不安からの逃避に過ぎないのか。想像はふくらむ。もちろん現時点で断言することはできないが、いずれにせよ、新しい世代の移民、およびアメリカ生まれの作家の脱アメリカ小説がアメリカ文学の現在を形成し、同時に今後の展開をも左右するひとつの流れとなりつつあること、そしてあの9・11以降、その勢いはさらに増す可能性があることだけは、ここに付記して語っておくべきだろう。

片渕悦久（かたふち・のぶひさ）
一九六五年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学（英文学）。北陸大学、同志社女子大学を経て、現在、大阪大学大学院文学研究科助教授（英米文学）。共編著に、『自己実現とアメリカ文学』、『アイデンティティとアメリカ小説』（いずれも晃洋書房）、『アメリカン・スタディーズ入門』（明書房）がある。

対談・不安をかたどる 3

不安に向き合うということ

――いろいろな事例を伺って、不安というテーマに立ち戻ってみた場合、現代社会のさまざまな不安をまえにして、われわれの人文学はどのようなスタンスで臨みうるのか。もう一度問い直してみたいと思います。

春日　基本的にはサイエンスショップにしても、コンセンサス会議にしても、コーディネーター、あるいはファシリテーターの役割というのが非常に重要です。それはやはり問題をかなり包括的に捉えなければならないということで、その点まさに中岡先生の臨床哲学は、よい実践例だと思っています。

中岡　現在、同志社大学にヒューマンセキュリティをテーマにする研究所ができていて、セキュリティとは何なのかということを哲学的な観点からも研究する取り組みがはじまりました。安全とか安心というものの捉え方をめぐっては、やはり哲学を含めた人文学の今までの経験が働く余地があるんだろうと思います。

――今回、特集の準備段階で人文学のいろいろな分野の方と相談をさせていただきました。そのとき指摘されたのは、不安というのはつまるところ主観的な問題であり、その解消は個別的・個人的たらざるをえないのではないか、という点です。言いかえれば、不安の問題は心理学的トピックだという議論ですよね。

中岡　たしかに不安は個別的なものであって、個別に対処しなければいけないっていうことも言えると思います。でも他方で、不安の起き方にはいくつかのパターンがあったり、原因があったりしますよね。考えてみればわれわれが生存しているから、人と人とが暮らす中で気遣いというものを持っているからこそ、不安が生じるわけですね。

そうしたなかで人文学に何ができるかを考えた場合、最初にお話にでたような不安というものの形而上学的な捉え方が一方でありましたよね。ハイデガーなどはああしたかたちで不安というものを（悪い意味ではなく）フレームアップした、つまり枠組みを与えたわけだけれども、他方ではごく普通の人々が持っている不安もあるわけです。これは適切な対比かどうか分かりませんが、水子地蔵ってあるでしょう。あれはもちろん妊娠中絶の経験がある人が関心を持つわけですけれども、経験のない人でも、何代前のご先祖の祟りが今あなたにこういうかたちで出ているんです、と言われればそれを信じてしまったりするんですね。

そういう非常に漠然とした不安感が、水子地蔵という形で表出される。これも一種の

春日 匠（かすが・しょう）
一九七三年生まれ。京都大学人間環境研究科博士課程満期退学。文化人類学専攻。NPO法人サイエンス・コミュニケーションの活動を通して、科学技術・情報技術と文化の関わりを文化人類学、科学哲学の視点から研究。主要テーマに遺伝子組換え作物をめぐる社会経済の変容、政策決定の過程など。共著に『小笠原学ことはじめ　小笠原シリーズ1』（ダニエル・ロング編　南方新社）がある。

中岡成文（なかおか・なりふみ）
一九五〇年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程退学（哲学）。福岡女子大学専任講師などを経て、現在大阪大学大学院文学研究科教授（臨床哲学）。主著に『臨床的理性批判』（岩波書店）、『ハーバーマス―コミュニケーション行為』（講談社）など。

フレームアップだと思うんですよ。ずいぶん違う種類のようだけれども、ハイデガーの言うような不安のフレームアップの仕方もあるし、水子地蔵のような民俗的な、宗教心理的なフレームアップの仕方もある。

フレームアップすることはそれなりに意味があるんだけれども、水子地蔵の例のように、それが不必要に不安を増大させる可能性もでてくるわけです。

春日　わかります。要するに操作的に不安をある種の恐れの対象に結実させてしまうのですね。ファシズムとか外国人排斥などの動きはまさにそうだと思います。

中岡　それにたいして、等身大の不安といいますか、フレームアップされないそのもの自体の出来事にほんらい人間は向かい合うことはできると思うし、人文学はそれを助けることができると私は思うんです。

春日　それは非常に重要なポイントだと思います。やっぱり原点に立ち戻る意味で、不安というものをつねに問題意識として持っておく必要がありますね。

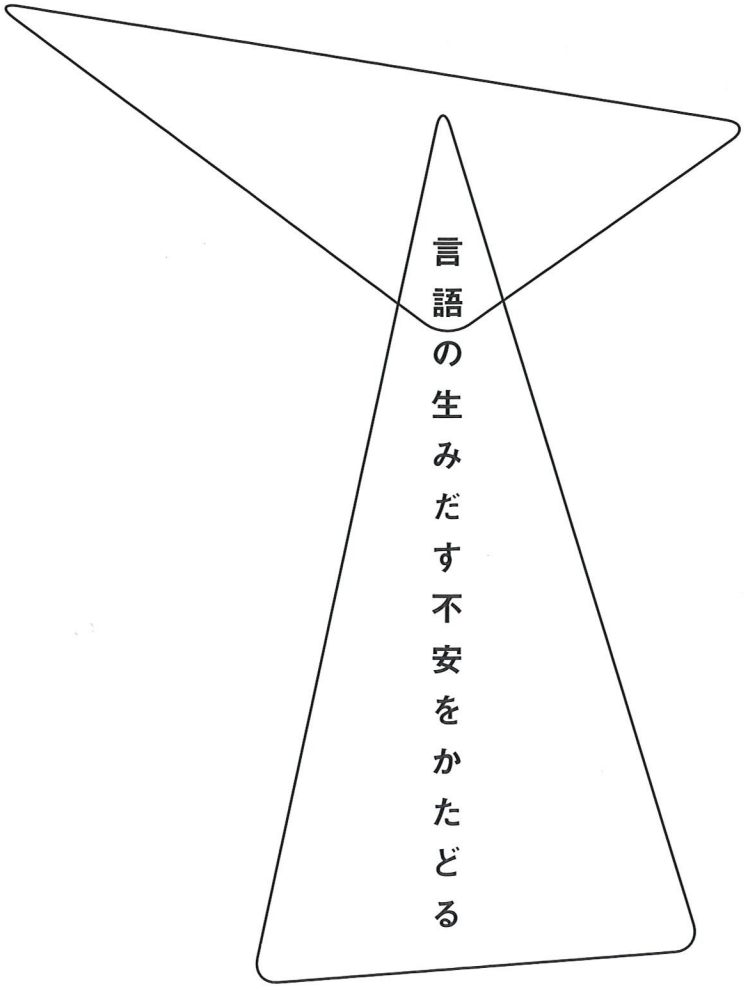
中岡　たとえば、少し前までハザードマップ（災害危険箇所分布図）は公にされなかったですよね。それは人びとの不安をかきたて、パニックを引き起こすかもしれないから。しかし今はむしろ、ハザードマップを積極的に公開して注意を促す方向になっていますよね。市民がパニックに陥らないだろうという信頼ができつつあるのかもしれない。

春日　これまでの感覚だったら、ハザードがあったら潰せばいいじゃないかという結論になりがちでした。木造住宅地域があったら、全部さっさと鉄筋に変えろという話になった。それにたいして、地震はいつどこで起こるという予測が完全にたつわけじゃないし、どういう風に揺れるかも分からないし、完璧に安全な家というのは建てようがないということを認めた上で、この家にはこういうリスクがこういう形で存在していますからその部分を考慮して生活してください、といった説明責任のほうを重視するようになってきた。そこには社会を完全にコントロールする最終的な責任を、専門家機関である政府や大学がとれなくなってきているところもあると思うんですね。

でも不安というものに立ち返る原則にしたがうなら、それはけっして悪いことではないと思います。そもそも世界を完全にコントロールするなんて誰にもできるわけはないですから、人文科学であれ、自然科学であれ、専門家の最低限のモラルは不安あるいはある種抽象的な問題意識を実体化して、それにたいする対応のプロセスの説明をきちんと果たすことではないでしょうか。ある種の社会問題を全部集約させて結論だけ述べるのはやはり倫理違反な気がします。

中岡　被害をゼロにすることは所詮できない、リスクはゼロにならないということを専門家はまずはっきりと認めてそれを表現する。すると市民のほうでも当然不安は持つんですけど、確実性の高い情報のもとで不安というものと上手に付き合っていく。そこがポイントなのではないかと思います。

不安というものと上手に付き合っていく



言語の生みだす不安をかたどる

Case Study 03

特集
不安をかたどる

「失う」不安

前田達朗

「方言なんか話しとったら、朝鮮人に間違えらるっど、て言われたものだ」と出会ったお年寄りたちが言う。

我々の調査のフィールドである奄美大島の瀬戸内町は、町村合併の際、景色が似ていることからその名がついたように、本島の対岸に大小の島々が連なり、ダイビングのスポットとして知られる美しい海と南国の太陽が輝く。ここでももちろん方言排斥・標準語励行は例外ではなく、「方言（罰）札」の思い出とともにこの話しは語られる。ゆっくり流れる時空間で、穏やかな表情の人々によって語られるだけに、よりやりきれなさを感じる。戦争の前後を通じて奄美の人々の主な出稼ぎ先が阪神間であったことを考えると、そこは在日コリアンが多くやってきて住む場所でもあり、労働市場が重り、様々なせめぎ合いがあったであろうことは想像に難くない。そして奄美の人々は「シマ」（集落、村の意）を出て自分たちがどう位置づけされているかを思い知らされることになる。奄美の言葉、「シマグチ」に最終的に手を下したのはこういう経験をさせられた奄美の人々自身であった。

生きるために「奄美性」を消し去りたいと考えた人々を責める言葉を誰も持ち得ない。奄美に行くと人々が「日本」を内地以上に意識していることを感じる。しばしば日の丸を見かけるし、お年寄りは床の間に皇族の写真を飾る。激烈な「本土復帰運動」を生き抜いたことが今でも誇らしげに語られる。「日本」であることを疑われ続けた「不安」が人々に本来の豊かな言語文化を捨てる道を選ばせた。古くからの地名に漢字を当てはめ、そして「瀬戸内」という日本風の名前で全体を覆い尽くしたように。

そして今、人々は「奄美」を失うかも知れない不安に苛まれている。「シマグチ」を話せる人々の数が限られてきていることを考えると、その「不安」は早晩現実のものとなるに違いない。「不安」を彼らに抱かせた者が誰か、ということを問う作業にはまだとりかかれないでいる。侵略者としての薩摩は記憶されているが、その向こうにあるものは見ないようにしているのかもしれない。在日の人々も前世紀初頭から「不安」と戦い続けた。故郷を失う不安は自分たちの精神文化を失う不安につながり、さらに「日本」で生きることを余儀なくされた彼らではあるが、居場所を失う「不安」から、出自を隠すといったような戦術で対抗せざるを得ない状況は過去のものではない。失う「不安」が同時に在日コリアンの人々が呑み込まれまいとする様々な努力、例えば民族教育、例えば文化伝承などにもつながっているのも間違いない。

在日と奄美の人々の大きな違いは言うまでもなく規範とされる価値基準の集合体「日本」との距離の取り方であろう。より距離のある言語体系を持ち独自の文化を持ち得た朝鮮、あるいは「本国」の存在は在日の拠り所になったことは間違いがない。自らの土地にいながらそこを侵され続け、自分たちで何かを決める機会がついにはなかった奄美のほうが、その意味ではより少数者である。帝国日本が朝鮮語を「方言」と呼ぼうとしていたのと同じ文脈で、我々は奄美の言葉を「方言」と呼んでいる可能性についても自覚しておく必要がある。ある言葉を「方言」だと決めてしまうのはけっして方言学や言語学ではないからである。だとすればある言葉を「方言」と呼んでしまう責任について考えなければならない。

このように周縁化された人々が抱える「不安」は、残酷なまでに鮮やかである。しかしおそらくは同じ同心円の内側にいるであろう「日本人」について言うと、そう言う「不安」が少しずつぼやけてしまう。円の中心により近いことで安心感を得ることはあっても、自分が何かを失っていると言うことに無自覚であるとも言える。均質であることを求める国家という装置はその領域内の「不安」をそれとはわからずに通り過ぎさせることで完成されるのかも知れない。

前田達朗（まえだ・たつろう）
一九六五年生まれ。大阪大学文学研究科日本語学専攻（社会言語学講座）博士後期課程在学中。在日をはじめとする日本の言語少数者の問題に取り組む。国立民族学博物館共同研究員。二〇〇四年度特別展示「多みんぞくニホン」展展示実行委員。共著「在日コリアンの言語相」（和泉書院）。